

交流深め「墓友」と眠る

はかとも

ライフスタイルが多様化し、先祖代々の墓を将来にわたって維持することが難しい時代になりました。樹木葬で自然に戻る、納骨堂や永代供養墓に入るなど、墓に関する考え方も変化しています。どんな埋葬方法を選んでも、その場所は生きている人が故人を偲び、手を合わせる場所となります。一例として、石岡市内の明圓寺を訪ねました。

開かれた寺目指す

石岡市真家にある明圓寺は親鸞の弟子、弁円が1240年に開山した浄土真宗の山寺。現在の土井千浩住職(58)は29世になります。裏山に馬滝が流れ、木々に囲まれた静かな場所ですが近年、過疎化が進み、檀家とってお寺を支えてくれた人たちも高齢化。「このままでは代々続いてきたお寺が守れない」と、檀家制にとられない「開かれたお寺」を目指したそうです。そこで考えたのが、「みんなで入れるお墓をつくる」ことでした。土井住職は「お墓を守れ

なくなった檀家さんや、実家が遠方の方、後継者がいない方など、さまざまな事情があります。生きているうちからお寺に足を運んでもらえる環境をつくり、「墓友」のような存在があってもよいのでは」と語ります。

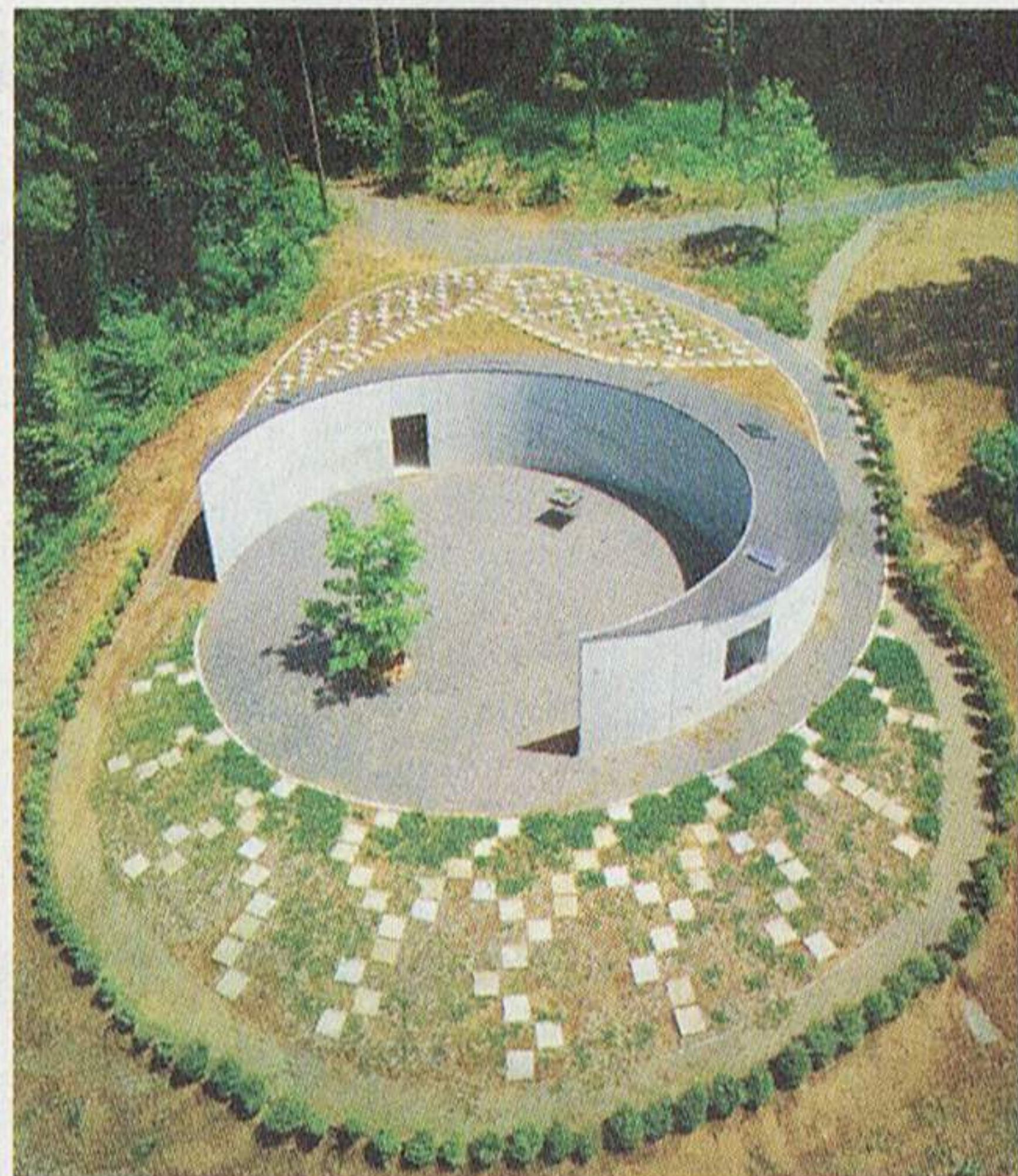
游心庵で永代供養

2015年8月、寺の裏山約900平方メートルに納骨堂と樹木葬「游心庵」を開設。これを機に、春と秋の年2回、見学者などを対象にしたイベント「山寺で遊ぶ会」を始めました。坊主である妻の和子さん(51)と共に、森の中で有機野菜を使った料理

を食べたり、納骨堂前の広場で演奏会を開いたり。毎回約25人が参加しています。

納骨堂には222人分の区画があり、故人だけでなく、ペット専用の場所もあります。33回忌まで個人柵で預かり、以降は永代供養として土に返します。また、樹木葬の区画には、個人エリア、共同エリア、ペットと一緒に入ることが可能なエリアもあります。

埋葬のあり方



納骨堂を囲むように整備された樹木葬エリア



納骨堂の内部

お寺から游心庵まで3〜4分ほどの山道は「智慧の小径」として、お参りに来た人が森林浴をしながら心を落ち着かせる空間としました。土井住職は「お墓は本人にとっては納骨する場所ですが、残された人にとっては心のよりどころになります。生前、縁のあった人とのふれ合いを通して、気持ちよくお参りする場所であってほしい」と話しています。



土井千浩住職と妻の和子さん